ZOCALO 2024 7 ▸ 9

ZOCALO＝ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

【主な記事】

企画展「吉田克朗展」関連特集
「僕自身が宇宙になり、宇宙が僕自身となる」

MOMASコレクション関連特集
「シュルレアリスム宣言100周年」

MUSEUM NEWS 2024.7 ▷ 2024.9

ミュージアム・ショップおすすめ商品

MOMASコレクション関連コラム「旅路の画家」

新任学芸員紹介「どうぞよろしく！」

表紙「第7回 パリ青年ビエンナーレ」（パルク・フローラル）にて、《赤・カンヴァス・電気など》を制作する吉田克朗。1971年9月。
© The Estate of Katsuro Yoshida / Courtesy of Yumiko Chiba Associates

僕自身が宇宙になり、宇宙が僕自身となる

企画展「吉田克朗展 －ものに、風景に、世界に触れる」
2024年7月13日（土）～ 9月23日（月・祝）

吉田克朗（1943－1999）が55歳で他界してから25年が経ち、その待望の初回顧展を当館で開催します。吉田克朗は深谷市出身で、当館と縁が深い作家でした。生前は「版画の今日」（1984）、「アート・エキサイティング '89－現在を超えて」（1989）、「1970年－物質と知覚：もの派と根源を問う作家たち」（1995）といった企画展に出品、1997年には6日間にわたる実技講座「現代絵画の実践と理論－フロッタージュから絵画を描く」の講師をつとめました。1996年には、「もの派」と言われる時期に関わる貴重な初期作品2点が、当館に収集されています。

筆者は駆け出しの学芸員の頃、上述の企画展「1970年－物質と知覚」を担当する機会を得て、一年以上にわたり吉田克朗の作品や資料を調査しました。作家自身の出発点であり、戦後美術の変革期にあたる1960年代末から70年代初めの美術動向の話を直接伺えた経験は、学芸員として大きな財産となっています。また、どんな人に対してもユーモアを交え、温かく接する人柄は忘れ難く、懐かしく思い出されます。

図1

ところが、こういった気さくな人柄とは対照的に、作品の制作に関しては内省的でストイックであったことが、遺された資料や作品から分かってきました。その様子は、没後に見つかった作者の制作ノートから伝わってきます。1960年代末から80年代前半にかけて記されたこれらのノートには、作品のプランやアイディアに加え、自らの制作のあり方、時代状況に対する考え、哲学的な思索が綴られています。物、オブジェ、状態、イメージ、視覚といったキーワードが反芻され、作者の思考が漸進していく過程を窺うことができます。あるべき制作を追い求め執拗に自問し続ける姿勢は、ひとたび作風を確立してもそこに安住せず、別のシリーズを探求していく制作スタイルに投影されていると言えるでしょう。

図2

こうして、多摩美術大学絵画科を卒業した1960年代末から始まる約30年間の作家活動の中で生まれた作品は膨大な数に上り、作風は時代と共に変貌していきました。それを大局的にみれば、最初期の物体を扱う作品から、後半生に取り組んだ〈触〉という絵画シリーズへと移行したと言えるでしょう。しかし、制作の軌跡は様式上、明快に進展したわけではありません。

最初期に目を向けると、吉田克朗は物体を用いてその特性が自然に表出される作品を、1969年から集中的に制作しています。異質な物体の組み合わせ、物体に内在する重力やテンションの視覚化、物体の状態やそれが置かれた状況の提示、即物的に光る電球の導入など、後に「もの派」と称され、国際的に注目される動向の神髄と言える作品を次々と発表しました。その一方、物体を用いた作品と並行し、自ら撮影した風景写真を題材に、写った事物と作者の眼差しの関係を探る版画も手掛けています。ところが1971年になると物体を扱う「もの派」の作風に限界を感じ、赤い色彩や筆触といった絵画的要素を取り入れた作品を発表し始めます。

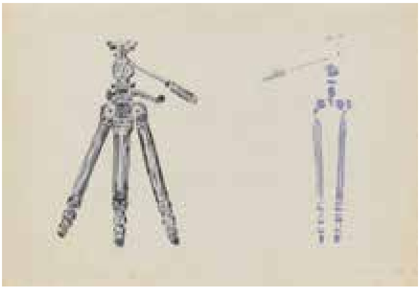

図3

1970年代後半は、物体に絵具を塗り、それを紙やカンヴァスに転写し、部分的に加筆したり、その物体自体を描画したりしながら、存在/不在/痕跡/イメージなどの関係を問う作品を試みます。また、壁面に施した筆触などを大型のカンヴァスに転写して制作する絵画も手掛けています。こういった複数の実験的な制作を経て、1980年代前半には風景写真などを断片的に参照しながら大胆に抽象化して描く〈かげろう〉の絵画シリーズに着手し、絵画におけるイメージの問題に向き合うようになります。その作風は1985年頃から始まる〈触〉の絵画シリーズへと引き継がれ、病没する直前まで〈触〉のシリーズに専心していきます。これが吉田克朗の事実上の終着点となりました。

図4

〈触〉は、絵具を地塗りしたカンヴァスを平置きにして、手指で粉末黒鉛をカンヴァスにこすり付けて描きます。手指がカンヴァスに接触する痕跡が蓄積され、その疎密や濃淡によって有機的な形象が画面に生まれます。形象は身体的でもあり、風景的でもあり、宇宙的でもあり、様々な印象が喚起されます。〈触〉の大作を前にすると、作品の外縁を越えていく拡がりが感じられ、見る者は作品がもたらす広大な世界に知覚と身体が奪われ、すっぽりと包まれていくような感覚を覚えます。

作家の出発点であったもの派期に、作品と作家自身が共鳴し合える関係になった時の様子について、吉田克朗は制作ノートにこんな言葉を記しています。「その時こそ、僕自身が宇宙になり、宇宙が僕自身となることができるのである」（1970年11月30日）。この言葉が言い表すものは、〈触〉の絵画までずっと通底し続けていたように思われるのです。（H.I.）

図5

1. Cut-off (Hang) 制作ノートより、1969年5月10日、The Estate of Katsuro Yoshida蔵
2. 参考図版《Cut-off (Hang)》1969年/本展では再制作作品（2024年）を展示、協力：The Estate of Katsuro Yoshida
3. 《Work "D-197"》1977年、The Estate of Katsuro Yoshida蔵
4. 《かげろう "4013"》1984年、宇都宮美術館蔵
5. 《触 "体-25"》1989年、The Estate of Katsuro Yoshida蔵

© The Estate of Katsuro Yoshida / Courtesy of Yumiko Chiba Associates

シュルレアリスム宣言100周年

MOMASコレクション
2024年6月8日（土）～ 8月25日（日）

1924年、フランスの詩人アンドレ・ブルトンが「シュルレアリスム宣言」を発表し、シュルレアリスムの運動が公式に創始されました。シュルレアリスムとは、理性の統制を逃れ、思考の自由な働きを表現することで、人間の本質に迫ろうとした芸術運動です。ブルトンは、予め何も考えず筆の赴くままにものを書く「自動記述」の実験によって、既成概念に捉われない不思議なテクストを生み出しました。「シュルレアリスム宣言」は当初、ブルトンが自動記述の手法で執筆した作品集『溶ける魚』の序文として書き始められましたが、途中から趣旨が変わり、宣言文として発表されました。その影響は文学にとどまらず、絵画や写真などの分野にも及び、さらに国境を越えて広がっていきました。

「シュルレアリスム宣言」から100年目となる2024年、世界各地でシュルレアリスムに関連する展覧会が開かれています。海外の大規模展としては、ブリュッセルを皮切りにヨーロッパとアメリカの5会場を巡回中の「イマジン！国際シュルレアリスムの100年」（ベルギー王立美術館、ポンピドゥー・センター、ハンブルク美術館、マフレ財団、フィラデルフィア美術館）が第一に挙げられるでしょう。エルンストやダリ、マグリットほか130点超が一堂に会する、たいへん充実した内容のようです。

国内に目を向けると、日本におけるシュルレアリスム運動の展開を時代背景とともに丹念に追った「シュルレアリスムと日本」（京都文化博物館、板橋区立美術館、三重県立美術館）が話題を呼びました。加えて、全国各地のコレクション展示においても、シュルレアリスムをテーマとした特集が組まれています。例えば、シュルレアリスムを日本に紹介した瀧口修造と関わりの深い富山県美術館では「『シュルレアリスム宣言』100年によせて」が開催されました。また、山梨県立美術館の「シュルレアリスムと山梨ゆかりのコレクション」では、地元出身の画家・詩人であり、独学でシュルレアリスムに取り組んだ米倉壽仁などが紹介されました。

当館でもこの流れに乗って、シュルレアリスムに関連する収蔵品を取り上げるコーナーを設けています。作品選定をしていて実感したのは、シュルレアリスムという言葉が示す範囲の幅広さでした。一口にシュルレアリスムといっても共通の様式があるわけではなく、作家それぞれの解釈によって多様な表現が生まれます。さらに、シュルレアリスムはダダをはじめとする他の芸術運動とも深く関わっており、複数の運動にまたがって活動した作家もいるため、どこまでがシュルレアリスムの作品と呼べるのか、厳密に線引きができるわけではありません。収蔵品を前に「これはシュルレアリスムなのか？」「これは違う？」と悩みながら、国際的な動向と埼玉ならではの文脈の両方をご紹介できるよう、展示を構成しました。

シュルレアリスムは1920年代後半から日本に紹介され、新しい表現を求める若い画家たちの関心を惹きつけました。埼玉ゆかりの作家の制作においても、シュルレアリスムやその系譜に位置づけられる表現や手法を見出すことができます。例えば、瑛九が1930年代から取り組んだ「フォト・デッサン」は、マン・レイなどのシュルレアリストが用いた、印画紙の上に物体を直接置いて感光させる写真技法の影響を受けています（①）。また、堀田操はシベリア抑留の経験をもとに廃墟のような心象風景を描き、戦争がもたらした深い傷に向き合いつづけました。

① 瑛九《作品（46）》制作年不詳

1980年代から一貫してフォトコラージュによる制作を続ける出店久夫も、シュルレアリスムの影響を公言する県内作家の一人です。出店は自ら撮りためた写真をコラージュし、手作業によるレタッチや彩色を加え、さらにその図像を反転・増殖させることによって、奇妙で幻想的な光景を生み出しています（②）。異世界のようでありながらどこか郷愁を感じさせる大画面は、作家の内面に深く潜り込む旅へと鑑賞者を誘うのです。

100年を経てなお色褪せることのないシュルレアリスムの魅力を、当館のコレクションを通してたっぷりと味わっていただければと思います。（S.Aya.）

② 出店久夫《鏡カラクリ'90 －VALNICAR》1990年